

日露戦争と 情報将軍 明石元二郎

平田 俶稔 54期



台湾総督時代

明石元二郎は、私の所属する「修猷偕行会」(福岡県立修猷館高校・旧制中学修猷館卒業の陸士・陸経の者で構成)の会員として名簿の頭号に掲載されておる非常に身近かに榮譽にも感じかつ心から畏敬する人物である。

私自身軍隊、陸上自衛隊を通じて情報畑を歩いてきた者として、情報将軍との偉名で賞讃される明石元二郎の功績には格別の興味をもって集めた資料から抜粋、編輯したこの稿である。

買われた語学の才能

陸軍大將明石元二郎は、元治元年8月1日福岡市に生れ、明治16年陸軍士官学校、同22年陸軍大学校を卒業した。が陸士時代から操行は余り良くなかつたらしく、ただ語学の能力は高く評価されていた。後の在欧時代次のエピソード

ソードがある。或るパーティでの席上ドイツ武官が仏語で彼に「貴官は、独語露語を話せるか」と聞いてきた。「いや小官は仏語以外はできない」と答えると、かのドイツ武官はロシア武官と盛んに機密を談じた。両国語に堪能な明石はその機密話を耳をそばだてた。(小森徳治氏著「明石元二郎」より)

日露戦争と情報将軍

この非凡な語学才能に目をつけた参謀本部は1901年フランス公使館付武官に、翌年8月にはロシア公使館付武官に任命した。また欧州各国での謀略活動を進めることができたのもこの語学才能あつてのことである。

極東アジアの小国であつた日本が欧州超大国ロシアを撃ち破つた歴史の日露戦争は、ロシア国内のツァーリ(皇帝)体制を揺さぶり、革命への流れを加速させた痛打であつた。明治の「情報将軍」の名で覚えられた明石は欧州全域をまたにかけた軍事諜報活動を展開するとともに口

シア国内外での革命運動を支援し続けた。(読売新聞20世紀企画班松岡宇直)

日露戦争三大勝因

明石の縦横無尽の諜報活動に対し当時の参謀本部はこの「ロシア革命の煽動」は「奉天大会戦」「日本海海戦」と共に戦勝の三本柱と激賞した。また後に特殊な情報要員を養成した陸軍中野学校のテキスト練成要綱の一節にも「外なる天業恢弘の範を明石大佐にとる」とあり最大級の賛辞といえる。

戦時特別任務の命課と明石工作の展開

日露戦争の勃発に伴いロシア公使館はサンクトペテルブルグから中立国スエーデンに移転、公使館付武官の明石の活動拠点もストックホルムに移り、そこに届いたのが児玉源太郎参謀次長からの戦時特別任務の命課、いよいよ明石工作の展開。脂の乗りきつた39歳の時である。

工作資金について

彼の謀略、諜報等の工作の目標は日露戦争勝利のためツァーリを継いだばかりのニコライ二世の帝政の弱体化、さらには打倒を中心として、戦略的にはシベリア鉄道爆破計画、同鉄道の軍事輸送力、反体制地下活動家の組織化と欧州各地の革命分子の大同団結、武装蜂起支援(武器供与)等があり、1904年2月の宣戦布告から翌年5月

頃までに活発化した。がこれらの工作資金として彼が参謀本部に要請した額は100万円(実際に使った金額は73万円)、当時の100万円は米の価格に比較すると現在の72億円に相当、国家予算額の上では1200億円に当る莫大なものであつた。(水木揚氏著「動乱はわが掌中にあり」参考)

当時スイスの支援者から購入した武器は小銃約2万500丁、弾丸約40万発と膨大な量にのぼつた。バルト海、黒海沿岸からの陸揚げには困難を極めたようである。この後モスクワを中心にコーカサス、グルジアからバルト海岸地区、ポーランド、フィンランド等各地で大規模な武装蜂起による騒乱が起きた事実はロシア革命の前夜のな記録として残つた事件である。

フィンランド人革命家シリヤクスとの出会い

明石にとつて天佑となつたのはフィンランド人革命家元判事、弁護士でロシア政府内部からの崩壊を企てた同志コンニ・シリヤクスとの知己を得たことである。1904年2月と7月の2回にたり謀議の機会をつくり抵抗派の統一戦線を結成、ロシア帝国の転覆への大きな力を構築することができたのである。この2人はよきパートナーとして後のパリ・ジュネーブ等での各国同志の糾合会議の成功を導いた。

(18年7月号)

ロシア革命の父といわれたウラジミール・レーニンも会議に出席し蜂起計画や武器配分の謀議に参画した。

明石工作与関連のあるその他の事件

1、僧ガボンを指導者としたペテルブルグでのデモの発生、多数の死傷者を出す惨劇に発展

2、過激組織「社会革命党」による内務大臣等要人暗殺の決行

3、ストライキの各地での勃発

4、黒海沿岸オデッサで戦艦ボチョムキン号の下士官反乱事件(05年6月)

これらは相関して次第にロシアの継戦意思を喪失する事態に追いこんだ。

明石のその後

05年9月に帰国命令が下り11月欧州を出発、帰国その後、朝鮮憲兵隊司令官として韓国併合にかかわる。次いで参謀次長を経て大正7年6月台湾総督に任せられ直後陸軍大将に昇任、台湾軍司令官を兼務したが翌大正8年10月55歳の若さで病死、男爵を贈位される。当時日本は情報に関し弱体であったが、明石は極めて敏感な感覚で情報を収集し、分析し評価してこれを活用して実行活動した。まさに明治の「情報将軍」を冠称され絶大の賞賛を受けた所以であろう。

参考 平成10年2月12日、平成16年9月24日読売新聞特集記事。